

**「ケアが根づく社会システム」研究開発領域
2026 年度新規採択プロジェクト概要**

新規採択プロジェクト①

誰もが当事者になれる「まちのケア」システムの構築と実装

研究代表者：今村 晴彦（長野県立大学大学院 健康栄養科学研究科 准教授）

概要
本プロジェクトは、社会のケア退縮のボトルネックを、地域コミュニティが自律的に学習し環境変化に適応する学習機能の脆弱化と捉える。そして、住民が自らのまちを引き受け、ともに学び、ともにある状態を「まちのケア」と名付け、実装科学とシステム思考の学術的融合により、誰もがその当事者になれる社会システムの構築と実装を目指す。 主なフィールドは、「長寿県」として知られる長野県須坂市の歴史ある保健指導員活動と、長野市善光寺門前地域の新しいまちづくり活動である。まず、記録分析や関係者・住民への各種調査結果を公衆衛生学、哲学、都市計画学等の学際的視点で分析する。そして、日常に埋め込まれた「まちのケア」とそれを阻むメンタルモデル（無意識の前提）を描出し、システム・ダイナミクスに基づく可視化を行う。さらに、対話に基づくチーム学習を軸に「まちのケア」の実装戦略パッケージを開発・実践し、他地域へ展開する。

新規採択プロジェクト②

変容期の痛みの経験者を核としたケア循環型社会の実現

研究代表者：住谷 昌彦（東京大学医学部附属病院 緩和ケア診療部 部長・准教授）

概要

人は誰しも人生の中で、怪我や疾病、障害、引退、老い等により、自らの身体機能や社会的な役割が変化することを経験する。こうした変化は身体的・心理的な「痛み」をもたらすだけでなく、能力や役割が人の価値と結びつけられやすい社会では「自らの価値を失った」という感覚を生み、その痛みをさらに増幅することがある。この「変容期の痛み」がもたらす困難や弱さは、周囲の人々の関心や関わりを引き出し、人と人とのつながりや支え合いというケアの起点になり得る。また、周囲の人々も、その関わりを通じて自らの弱さや生き方を捉え直したり、支えられたりすることがある。そこでは、ケアする側／される側の役割は固定されたものではなく、人と人との関係の中で相互に入れ替わり、ケアが巡っていく。

本プロジェクトでは、この「変容期の痛み」とそこに生じるケアの関係を、怪我や疾病等に伴う身体的痛み、職業・役割変容に伴う心理社会的な痛み、身体機能の喪失と身体拡張等の観点から分析・可視化する。また、医療・緩和ケア、当事者参加、義足等の身体拡張工学やデジタル可視化技術を通じて、こうしたケアの関係が広がる条件を探究する。そして、変容のあり方に関わらず一人ひとりの存在が尊重され、ケアする／される関係が固定されず、人と人との間に巡る社会の実現を目指す。

新規採択プロジェクト③

喪失と死を共に受けとめるケアリング・コミュニティの構築

研究代表者：竹之内 裕文（静岡大学 未来社会デザイン機構 副機構長・教授）

概要

私たちの社会には、さまざまな病気や認知症、障害とともに生きる人がいる。家族や親友、コンパニオンアニマルと死別した人がいる。生活に困窮する人やホームを失った人がいる。孤独・孤立や失業、うつに苦しむ人がいる。これら多様な仕方で喪失と死を経験する一人ひとりとともに生きる社会を築くための鍵は、「コミュニティ」にある。隣近所、学校や職場、趣味やボランティア活動の仲間、寺社や教会などのコミュニティ単位で、メンバーたちが力を合わせて、「喪失と死を共に受けとめるケアリング・コミュニティ」を育てていく。それを支援するため、本プロジェクトはコミュニティリーダーを育成して全国各地へ送り出す。だれでも、どこでも、コミュニティづくりを始められるように、ガイドブックを制作し、5種のモデルコミュニティと活動拠点を構築する。喪失と死の経験と知恵をわかちあう祭典、「喪失と死のフェス」を年次開催する。これらを通して「喪失と死の多様な経験を受けとめ、互いに助けあう社会」の足場を築いていく。

＜総評＞

「ケアが根づく社会システム」研究開発領域は、「互いを自然に気かけながら助け合えるコミュニティ形成や、人びとが環境と互恵的に関わり合えるインフラ等の生活基盤の自発的な実証が複数地域で始まっていること」を目標として、昨年度から開始しました。今年度は第2回目の公募選考を実施し、大学などの研究機関や民間企業等から計94件もの応募をいただきました。寄せられたテーマは、高齢化や孤立・孤独、医療・介護、防災、教育、就労、障害、まちづくり、自然環境との共生など極めて多岐にわたります。そして、「ケア」を起点として、これまで十分注目されてこなかった関係性や営みに目を向け、今日の社会と、その中にある関係性を問い直し、新たな価値を実装しようとする意欲的な提案が数多く見られました。

選考基準に基づき慎重に書類選考と面接選考を実施した結果、最終的に3件の研究開発プロジェクトを採択しました。選考にあたっては、「人は『ケアし、ケアされる』弱い存在である」という人間観と、ケアは担い手から受け手に一方的になされるものではなく、双方向性を持った行為、またはその行為が立ち現れる状況をいう、という観点のもと、人間のケアという営みに新しい視座を提供しうるかを重視しました。また、本領域では、ケアの価値を可視化するだけでなく、その価値を社会に根づかせるための実践活動を研究開発に含めることを求めており、その成果が他地域にも展開できる汎用性を有し、ひいてはケアを基盤とした社会システムの実現に向けた起点となり得るかという点も重視して評価を行いました。

採択したプロジェクトは、ケアを外部化せず住民が自らのまちを引き受け、共に学び共にある姿を目指すもの、多死社会において喪失と死を共に受け止めるコミュニティづくりとその展開を目指すもの、身体機能や社会的役割の変化を経験した人びとを核にケアが循環する社会を目指すもの、の3件です。いずれも、少子高齢化や孤立・孤独の進行、ケアする側・される側の役割の固定化が進む社会において、コミュニティや社会のあり方をケアを基盤に再構成していくことが期待されます。今後は、研究プロジェクトと領域マネジメントチームとの戦略会議やサイトビジット等を通じて、各プロジェクトの研究開発を伴走支援するとともに、プロジェクト間の対話や交流を促し、領域としての目標達成に向けた相乗効果の創出を目指していきます。

なお、本年度は、近年急激に発展している生成AIを活用した提案も多数見られました。提案には大きな期待が寄せられた一方、対象とするケアの価値や意義について、さらなる検討が必要と思われるものも見受けられました。また、ケアという人びとの文脈や関係性が重視される営みを扱う上で、技術の妥当性や限界、倫理的配慮、人間と技術の関係などについて、さらなる検討が必要であると判断され、残念ながら採択には至りませんでした。次年度の募集においては、これらの点をさらに深化させた提案が寄せられることを期待します。

**「ケアが根づく社会システム」研究開発領域
2026 年度応募数および採択数**

○ 応募数および採択数

応募	面接	採択	採択率
94	12	3	3.2%

○ 女性が研究代表者となっている課題の数

応募	面接	採択
39	6	0

○ 研究代表者所属

	国立大	公立大	私立大	国研・独法	公益法人	民間企業	NPO	自治体	その他	合計
応募数	46	10	30	6	0	1	1	0	0	94
面接数	8	2	1	1	0	0	0	0	0	12
採択数	2	1	0	0	0	0	0	0	0	3

○ 応募の地域別内訳（研究代表者所属）

北海道	東北	関東	中部	近畿	中国	四国	九州 沖縄	計
1	4	48	15	21	2	1	2	94

**「ケアが根づく社会システム」研究開発領域
評価者一覧**

	氏名	所属・役職
領域総括	西村 ユミ	東京都立大学 健康福祉学部 教授
領域 アドバイザー	臼井 恵美子	一橋大学 経済研究所 教授
	岡田 美智男	筑紫女学園大学 現代社会学部 教授
	岡部 美香	大阪大学 大学院人間科学研究科 教授
	木多 道宏	大阪大学 大学院工学研究科 教授
	木村 篤信	日本リビングラボネットワーク 代表理事 ／東京都市大学 准教授 ／地域創生 Co デザイン研究所 地域創生アドバイザー
	桐山 伸也	静岡大学 学術院情報学領域 教授
	熊谷 晋一郎	東京大学 先端科学技術研究センター 教授
	榊原 哲也	東京女子大学 現代教養学部 教授
	千村 浩	代官山やまびこクリニック 院長
	二瓶 美里	東京大学 大学院情報理工学系研究科 教授
	細馬 宏通	早稲田大学 文学学術院 教授
	矢野 昌浩	名古屋大学 大学院法学研究科 教授
	和気 純子	東京都立大学 人文社会学部 教授

（五十音順、所属・役職は2026年9月時点）